

# 退 職 に あ た っ て

3月末で野村教授、泉助手が、民博を定年退職します。民博での思い出、今後の抱負などを綴っていただきました。

## 結末なき終わり

野村雅一 (のむらまさひと) 先端人類科学研究部

三月末で民博を去ることになります。長年勤務してきて申し訳ない気もしますが、正直、なんの感慨もないのです。しかし、感慨というものにもこだわると、三年前、ちょうど六〇歳をすぎたころ、おどろいたことがあります。還暦です。本卦にかえるのだそうです。自分の父親にはみんなで赤い頭巾をかぶらせ、赤いちゃんちゃんこを着せたのをおぼえています。しかし、わたしはまわりのだけからもなにもいわず、気がついたら六〇歳をすぎていました(満年齢ですが)。それで、何年も無沙汰していた敬愛するある先生におもいきって電話してみました。「はくも六〇歳になりました。なにか心境の変化でもおこるのではないかとおもっていたんですが、なんにもおこらないです。そんなものでしょうか」と唐突な質問をすると、先生は電話口で爆笑された。その先生は八〇歳になられたというのでしたが、年齢の風景も年齢によつてかわつてくると話しておられた。加齢はだれにとつてもその都度、初体験だとよくいわれますが、そのことをおっしゃっていたのか。もしかして赤頭巾をかぶせられたわたしの父親もなにも感じるものはなかったのだろうか、とおもいました。

きつた還暦体験がきっかけになったとおもいます。もっとも、その少し前にも頼まれ仕事でエイジングにかかわる発表をしたことがあります。二〇〇〇年八月にフィンランドでひらかれた「ヨーロッパ日本研究者協会大会」に招待された際、せつかくだからオリジナルな報告を、「ガングロ」など日本の十代のファッションとボディメイクングについて研究しました。その翌年には東京銀座産生堂の「サクセフルエイジング講座」のホスト役をうとめる機会をあたえられ、老いについて勉強しました(一連のトークは「老いのデザイン」野村雅一編著、求龍堂、にまとめています)。

しかし、エイジングの問題もふくめ、以前から続けてきた人間の身体表現の研究にちよと新発見があったかとおもったのは、二〇〇〇年春の企画公演「みんばくミュージアム劇場」からだは表現する」をとりしきったときです。民博の特別展示館に円形劇場をつくらせて、世界のトップ・パフォーマンスを招いて身体表現の可能性について考えようという、博物館には無謀な企画でした。それは、前からあった別の計画が頓挫した拳句、世紀の変わり目になにもないのは淋しいということ御鉢がまわってきたと記憶していますが、依頼されてから公演開催まで一年もない状況で、わたしにとつてもまさに一世一代の大芝居になりました。その成果



撮影:フリースペース・海野豊世

京都大学大学院文学研究科博士課程中退。京都大学文学部人類学専任講師を経て、1978年に民博着任。総合研究大学院大学文化科学研究科教授。身ぶりやしぐさを含む人間の多様なコミュニケーションを世界規模で研究する。また、イタリア、ギリシャなど南ヨーロッパの民俗文化を研究。著書に「しぐさの人間学」(河出書房新社)「老いのデザイン」(求龍堂)「身ぶりとしぐさの人類学」(中央公論新書)「ボディランゲージを読む—身ぶり空間の文化」(平凡社ライブラリー)など。

## 忘れえぬ人びと

泉 幽香 (いずみゆか) 民族社会研究部

在籍した三〇年間で特に思い出深いのは、民博一〇周年記念イベント「みんばくこんびゅう」とびあ世界の文字・音楽・仮面」のメンバーに加わったことです。仮面を担当した私は、マルチウインドウ・システムを標本検査に適用するため、コンピュータに入力した画像や情報から仮面を選び出す作業を受けました。

仮面は儀礼や舞踏・祭でよく用いられます。世界の仮面には、人、獣、爬虫類、虫をかたどったものや、それらを組み合わせたものが見られます。神聖、邪悪など、特別な意味や性格を象徴した仮面もありました。イベントで使用される仮面標本の画像をよびだす属性を一枚ずつカード化する作業では、各地域を専門とする多くの研究者にご協力いただきました。

インドの古典叙事詩「ラーマヤナ」「マハーバーラタ」の登場人物の仮面については、サンスクリット古典祭祀儀礼の専門家、井狩彌介先生、水ノ尾真吾先生。二つの叙事詩がインドネシアに伝わったあとの物語については、故吉田集面先生と吉本忍先生。南インドからスリランカの、疾病を退散させる厄病神の仮面については、田中雅一先生。新大陸では、イロクオイ族の神様によばれて柱の陰に隠れた際、鼻が曲がってしまった鼻曲がり男の面、メキシコ先住民の二重の神聖性をあらわす老人の面、

神殿などの水口に置かれたというジャガターの仮面などについて、中南米を専門とする黒田悦子先生と八杉穂穂先生。アフリカのカメルーンやナイジェリア連邦共和国で多く見られる祖霊の仮面については端信行先生。民博を去った方や故人も多いが、ともにプロジェクトのメンバーとして立ち働いた仲間たち、そしてお世話になった皆様の面差しは今もなお忘れがたいものです。

フィールド調査で印象に残っているのは、カナダ西部アルバータ州西南部の平原先住民の雄ブラックフットのリーダー、ジョージ・クローウ・シユウ氏のことです。ロッキー山脈の東側フットヒルの一角にあるセンター内の青少年教育室には、彼の生涯にわたるすべての所蔵品が収められていました。私が訪れた一九九八年当時、文化担当であるお嬢さんのルイザさんに、お父様の一番大切なものを尋ねると、一隅に飾られたハツファローのローハイド(蘇)ではない生皮)のアンペロフ「パフレッシュ」を指し示されました。アンペロフとは、日常品や書類、乾燥肉と加工抽出された脂肪とペリりを発酵させた保存食品「ベミカン」や、場合によっては水もいれることができ、馬での運搬も可能な革製の風呂敷です。通常は、部族や家族ごとの意匠が施されているのですが、それは平原先住民の代表的なモチーフ「熊の爪(またはファイブ・コーナース)」も、ジグザグ模



撮影:福永幸治

東京大学大学院社会科学研究所修士課程修了、東北大学大学院教育学研究科博士課程中退後、東北大学教育学部助手を経て、1975年に民博着任。専門は、日本およびフランス農村社会に於ける家族生活の比較文化的研究。論文等「視覚的思考をめぐる覚え書——構造主義の交換論的視点から」(『国立民族学博物館研究報告』)「『構造』認識の『認識構造』序説——レヴィ・ストロース『交換論』の認識地平をめぐる若干の考察」(『社会学年報』)など。2005年には国際シンポジウム「発酵食品と感覚受容」を主催。

様の雷(稲妻)紋も何もない、無地の品でした。儀式の用具でもなく、それらを容れる器「ナトワ」でもなく、鷲などの鳥の羽のついた頭飾りでもなく、身近なアンペロフを選ばれたのは、彼の正直な性格をよくあらわしているように思えました。白人と一度も戦わずにブラックフット内の三トライブ(部族)間を調整し、率いてきた氏は、実在そのものがシンボルたりえた例といえるかもしれません。そして、それこそが未来の青少年たちに託したかった彼の想いだっただけではないでしょうか。



2001年アルバータ州クラーサムソンキャンプにて、ファンシー・ダンサーの少女たちと。母方の亡くなった近親のデザインを継承した衣装をまわって踊る